

こういう話があります。ある幼稚園の先生が黒板に「悪魔」という漢字を書いて「誰かこれ読めるかな？」と聞いたのです。

当然誰も読めませんから、「じゃあ、教えてあげようね」と言ったら、「先生、待って。自分たちで考えるから」と子どもたちが言ったのです。

子どもたちは相談を始めて、悪魔の魔という字には下のほうに「鬼」という字があるから、じゃあ鬼の仲間だ……こうしてだんだん話を詰めていって、これはどうも悪魔じゃないかというようなことになりました。

「先生、それ『あくま』っていう字じゃない？」と言ったので、びっくりしたそうです。幼稚園の園児です。

この例を紹介したのは、二つの意味があります。

一つは、三、四歳の子どもでも「推理する能力」があるということです。それともう一つは、これが一番大切なことですが、子どもというのは、基本的には教えてもらいたくないのです。知りたい、自分で解決したいという気持ちがあるのです。これが人間の本性なのです。

赤ちゃんの身の回りに漢字があれば、「これ何だろう」と知りたがるものです。それに対して、「こんなことは学校に行ってから習うのよ」と言ってお母さんがほとんどです。でも、子どもが知りたがって

ることは何でも教えたほうがいいのです。

しかし、詰め込みはいけません。また、先走ると失敗します。聞かれたときは教え、聞かれないときは教えない。これが基本です。教えるということは、子どもが解決するという力を使わないことになります。自分が求めて知ると、与えられて知るとでは天地ほどの違いがあります。

求めるということは、自分の頭を使うわけですが、教えられるとは、そのような頭の使い方をしません。自分で解決するのと教えられるのとは違います。教えられたものというのは、ある意味からいえば本当の力ではないから、わかったつもりでも、今度それを表現することはできません。

自分で考えながら歩いた道はいつでも歩けますが、知っている人について歩いた道というのはひとりで歩けと言われても歩けません。それだけの違いがあるのです。幼児でも自分で知るだけの力があります。